

源氏物語千年紀から：枝葉のこと

北村 弘行

寛弘5（1008）年11月1日、【左衛門の督「あなかしこ。このわたりに、わかむらさきやさぶらふ」とうかがひ給ふ。源氏に似るべき人も見え給わぬに、かのうへはみていかでものし給はむと、聞きみたり。】紫式部日記・岩波文庫刊より。

平成20（2008）年が源氏物語誕生から1000年として多くの記念行事が催された。

さて、そのみやこにあつては。

§ みやこびとの地方観を考える

天平宝字8（695）年10月11日の詔で殺生禁断令が、牛・馬・犬・猿・鶏の殺生禁断からはじまって魚類にまでおよんできた。この禁断令が地方へ流布されるにつれ漁民への賤視感がますます強まった。みやこに住む国家の支配層、それに付随する人びとの多くは、地方で生活体験することなく、地方を蔑視する傾向があったものと考えられる。

天平4（663）年白村江で日本軍は壊滅的な敗北をし、そのため唐、新羅軍の攻撃を防ぐため本土防衛の西のかなめとして、九州に大宰府が設けられた。

延喜1（901）年菅原道真是讒言で、九州大宰府に権帥で左遷された。大宰府では日々身の不運をなげき悲しんで2年後に死んだといわれている。左遷であっても西海道を統括する拠点官庁の指揮官として赴任したことに、なぜなげき悲しむのか。

それでは前任者たちはみな赴任して悲嘆にくれたのだろうか。大宰府が設けられてから約240年にしてなおこのような史実、みやこでの暮らしがよほどよかったのではと考えるようになる。わが国の西国、大宰府地域に生活をしている人々にたいする蔑視そのものといえよう。この時期、みやこから辺境、境界などと呼ばれていた西海道大宰府地方には人々が多く集まり、物資の交流が盛んであったとする研究もきかれる。

清少納言は博学多識で、機智にあふれ、紫式部と並び称された人と伝えられている。この人があらわした枕草子のなかに「下衆」の語が多くでてくる。

藤原道隆の長女が、中宮定子につかえ上流社会で暮らす日々の視線で、庶民を蔑視した記述と想像される。角川版枕草子で「下衆、下衆男、下衆女」の出現頻度をかぞえると、20回程見られるとの調査もある。みやこの支配層から

眺めた地方への蔑視、職業の賤視は抜きがたいものが感じられる。

律令制のもと人為的に身分差別が拡大強化されていった。それでも古代の人々はたくましく生きつづけてきた。

平安時代から話はとぶ。太平洋戦争で国家総動員の体制が敗戦と共に崩壊した。困難な学生生活が待ち構えていた。

§ 食糧危機と島根県中海

戦争が終わって、次なる危機が食糧不足となって襲ってきた。函館も食糧不足が、極限にまできており、しわ寄せが、全国各地からきて下宿生活をしている学生にとって、致命的な危機となった。学校はこの事態を深刻にうけ、各学生に帰郷をうながし、実家の近くにある、水産関係の試験研究機関で実習・研修を行ない、その報告書で授業単位を認めるとした。

大阪、神戸周辺はアメリカ軍の大空襲で、水産関係の研究施設は壊滅状態で、当時島根県中海に面した能義郡荒島村に設置されていた、農林省水産試験場荒島試験地で実習することになった。試験地には先輩の畑久三さん（北大附属水産専門部、大正15年卒）が責任者として駐在されていた。

試験地に滞在中の宿舎として、旧家の伊藤さん宅の離れが予定されていた。農林省水産講習所から学徒動員で海軍中尉から復員された北森さん、加藤さんも同じ部屋で生活をするかとなった。裏口を出るとそこは中海。路地から小船ですぐ漕ぎ出すことができた。

戦後の混乱時期にもかかわらず、松平不昧公以来の茶菓の風土か、伊藤さんのお宅はもとより、午後のひととき近所を訪れたときは、上がり框に腰掛けお薄をいただきながら世間話をした。樺太の思い出も交えて。

§ 思い出の遠淵湖

平成11（1999）年1月10日の夜、NHK・TVは司馬遼太郎原作の「街道を往く、オホーツクの道」を放映していた。網走から稚内までの様子が、どのように捉えられているか、冬景色のオホーツク海岸を、炬燵にはいって眺めていた。網走から能取湖、サロマ湖となつかしい風景が目に入ってくる。家人と訪れた枝幸町からクッチャロ湖の雪景色が、白鳥とともに映されてきた。

白鳥に餌をあたえている人物が写る。何気なくみとれていた。浜頓別町に住んでいる山内さんとか。映像は山内さんの自宅で、大きな樺太の地図を広げ、ご自分の出生地の説明と、そこでの白鳥のおもいでが語られていた。その地は私にとって忘れることのない「遠淵湖」がある遠淵村であった。また「樺太写真帳」の表紙が見えるアルバムには遠淵湖の白鳥、漁船、湖岸風景などが収め

られていた。

司馬遼太郎氏は北海道からサハリン、間宮海峡、そして黒竜江を目指す街道を「韃靼の道」と考えていたようだとも。

遠淵湖から函館へ、そして青森から大阪へ思い出が甦ってくる。

【青函連絡船の機関室通路に腰をおろし青森へ。どの駅に停まるかわからないまま、大阪行きの臨時列車に乗り込んだ。窓ガラスは割れ、ぎっしりと詰まった車内、昇降口は通ることも出来ず、小用も足せない混みよう。動きだせばどこまで行くのか、どこまで走るのか、走りだせばどこまで走り続けるのか、一旦停まったらいつまで停まっているのか、駅でもないところで、列車が座り込んでしまうようなこともあった。顔が煤で黒くなったまま、無事大阪駅に到着した】

この年の新春はNHKからのおもわぬ贈り物に興奮を覚えた。

先年、米子市になっている荒島を訪れた。中海の岸は整備され、当時裏口からすぐに、船をうかべられた海面は遠くに去っている。なぜか宝物が消えてしまった想いが身を包んだ。沖に見える大根島は靄に霞み、静かな水面は雲を映していた。(2008.11.22, 記)